

平成29年2月20日

## 日本リハビリテーション専門学校「第二回学校関係者評価委員会」報告

1. 日時 平成29年2月17日（金）16:00～16:45
2. 場所 日本リハビリテーション専門学校第二校舎6階
3. 出席者  
委員：高田、松岡、古川、山下、栗原（欠席：武市）  
事務局：陶山、二瓶、工藤、畠山、近野、篠田、鈴木雅、深瀬
4. 会議内容  
以下議題に添って進行

### 【議題】学校関係者評価委員会

- ① 国家試験対策の進捗状況について
- ② 平成29年度学生募集状況について
- ③ 平成27年度職業実践専門課程自己評価に対する各委員の評価について
- ④ 福田学園の第三者評価について

事務局 工藤

評価委員会を開始、資料に添って説明。

（意見交換）

事務局 工藤 ご意見やご感想をいただければ幸いです。

古川委員

国試対策はとても熱心に取り組まれていて学生さんたちはレベルアップされているのではないかと思います。何名かはお苦勞されている学生もいるとは思いますが、それぞれの努力の結果だと思えますし、学校としてできる取組みとしてこれ以上はなかなか無いのではないかと思います。

募集状況については、夜間部が心配なところではありますけども、近隣の専門学校も夜間部の募集は苦戦しているようだ。日リハだけの問題ではない。ただ、だからと言って何もしなくても良いということではないので、夜間部の判定の仕方や募集のあり方についてはもっと十分な検討が必要なのではないかと思う。

【平成27年度職業実践専門課程自己評価（日本リハビリテーション専門学校）】に対する学校関係者評価委員として、第三者評価については、私自身が学生でいたころと卒業してからの経験から見て、思うところもあったり、どのように評価すべきか難しい部分もあるが出来る限りご協力させていただければと思っている。

山下委員 国試対策については、個別指導を行うなど、できる限りのことをやってくれているのではないかと思います。非常に手厚い支援をしていると思う。きっと良い結果につながるのではないかと考えている。

学生募集に関しては、ネットの時代になっているのでそこら辺をどう使うか、また地域貢献活動のかんだ川会などの活動がもっと広がって行けば学校のアピールになるのではないかと思います。

第三者評価については、どのように評価して行けばよいかと思案している。学校が真剣に取り組んでいるということはよくわかった。自己評価より第三者評価の方が上回っていることがその姿勢を現しているのではないかと感じた。

事務局 工藤 ありがとうございます。高田先生、大学との比較でコメントを頂けますでしょうか。

高田委員 事務部門の管理の方は非常に評価されている。教育の質的なもの等が少し評価基準の読み違いがあるのかと感じた。4でも良いと思うところが3になっているところがあった。

事務局 工藤 どちらかと言うと評価基準は見方が非常に厳しい。学校としてはやって当たり前のように評価されるので、ギャップが出るのではないかと思います。大学の募集状況はいかがでしょうか。

高田委員 定員増の大学や、新設大学が増えて募集は厳しい状況である。

事務局 工藤 専門学校の競合校からも厳しいという話を聞いている。

高田委員 夜間部の学校については特に厳しいという事を聞いている。

事務局 工藤 景気が良くなっていることも関係あるだろうと思う。求人倍率がバブル崩壊時の平成2年頃に戻っていることが影響あるのかもしれない。

事務局 篠田 学生の全体数が減っているし、レベルも下がってきている。大学等においても定員をどうするかという現実的な話も出てくる。そういった時に専門学校としてどういった方向に進むか。減って当たり前の時代が来る中で、その対策は学園としては弱いかもしれないと感じている。

学力低下に関しては、P T（昼）については、新カリキュラム（新カリ）を導入したわけだが、次年度の2年生くらいからカリキュラム授業時間数が相当減ってくる。よって、新カリの成果は2年生以降で出てくるのではない

かと思っている。

2年生においては減った授業時間の分を、ほぼすべて費やして学習ゼミを進める予定です。毎週ゼミが出来るのでその週の復習をグループでする時間にしていきたい。

事務局 近野 OT（昼）については、まだグループでのゼミはないが、新カリの2年生は演習系の時間割が多いので、座学ではなく演習の授業の中であまり学習が進まない学生のフォローをしつつ、主要な科目の復習の時間に当てられればと思っている。また今の2年生に成績不良者が多いが、その学生達を進級させるにあたって、学生指導をいかにしていくかということと、個別指導中心のプログラム強化や教員間の協力体制の構築を検討している。

事務局 二瓶 PT・OTの受入れ側として、今こういったPT・OTが欲しいという事があれば教えていただきたい。例えば、こういった分野をもう少しやってほしいとかはありますでしょうか。病院や施設においてのお話をお聞かせいただきたい。

松岡委員 施設の方では募集しても来てもらえない状況がある。病院でまずは経験を積んでというのが一般的なのだと思う。昔は介護老人保健施設（以下、老健）という1人職場というイメージがあったと思うが、私の職場でも12名のPTがいる。老健の魅力をお伝えしきれていない部分がある。地域に出ていくPT・OTが欲しいが人材を確保できない状況でもある。

事務局 二瓶 我々学校としては、病院で働くことを前提にPT・OTとして育成していくという事で良いのでしょうか。それとも老健での実習を強化していくことなども必要なのでしょうか。

松岡委員 他校になりますが、学校と実習地が連携する研修会がありました。体験や経験の場を作りながら考えてやって行けるような実習があればもう少し良いのかなとは思っている。ただ、新人にいきなり即戦力を求めるのは実際には難しいと思うので、人として接するとき大事な心とか考え方を持てる人が将来的には伸びる可能性が高いと実習生を見ていて思うことではある。

栗原委員 確かに1年目で即戦力を求めるのはやはり難しいと思う。ただ、身体障害分野で言えば、治療手技について知らない人が多いのでそこは重要かと思う。また、興味や疑問を持つ視点についてもう少し熱意を持つ人がいれば良いと思っている。

事務局 工藤      今の学生を見ても、文化祭や自治会についても昔のような活動への熱心さが薄くなっているように見えている。よって、学力というよりも意識の低下が問題なのかもしれないと思っている。

事務局 畠山      もちろん我々は学校なので、知識などは教えていかなければならないのだが、人としての心というか、責任を取りたがらない学生が増えているように感じている。集団として動く場合、責任を転嫁できる負のことに 대해서는共有するけれども、プラスのことを皆で作り上げるような気風がなくなってきた。そのことが臨床においても影響していると思う。

成績上位者で就職を希望していない学生も出てきている。PT・OTとしての夢がなくなってきたのかもしれない。そういう意味で、詰め込み式ではなくて自主性を重んじて行きたい部分があったが、緊急避難的に出来た学校としての救済対策があまり連続していくと、学生にとってむしろ良くない方向へ行くこともあるようだ。そんな中でも素敵な学生ももちろん多いのだが、印象としてクラスは昔より静かになった。一生の友人ができないまま卒業していくのは専門学校として残念なことである。

高田委員          大学に比べると専門学校の学生はPT・OTになりたいという意志の強い学生が多いと思う。大学の場合は、卒業さえすればPT・OTにならなくても学位は取得できる。偏差値で学校を選んでくるためリハビリ職についてよくわかっていないことも多い。その点、専門学校の場合は、PT・OTにならなくては意味がないので、意識の高い学生が多いのではないか。

ただ、なんとなく医療職だから良いだろうという感じで入学する学生も2～3割はいるのかもしれない。大学でも下位層では専門学校と同じような状況である。

大学において、学習方法として実績のある復習計画表を作成して学習を進めていくのだが、何度も何度も指導してようやく8割くらいできるようになっていく学生がほとんどなのが現状だ。

事務局 工藤      本日は貴重なお話ありがとうございました。